

ルポ ● 教壇からのトランスジェンダー告白

# ヒゲの土肥先生が ある日、女性に変わった

取材・文◎相馬佐江子（フリーライター）

撮影◎吉岡泉

性同一性障害という言葉が珍しくなくなり、2003年には戸籍上の性別も変更できるように法制度が整った。カミングアウトする人も増えてはいるが、まだまだ偏見がなくなったといえる状態ではない。そんな中、教育の現場で、自らのセクシュアリティと真直面からむきあう先生と、「彼女」を支える生徒たちがいる

## ある日の補習授業風景

京都府立A高校の放課後。1年4組の数学の補習授業が行われている。20人ほどの生徒が、数人ずつ机を囲みながら「因数分解」の問題を解いている。生徒A「この問題わかるか？ 解き方教えて」



生徒B「オレもわからん」  
生徒C「この前、教わったやんか」

あつちでもこつちでも、生徒同士で教えあう声、おしゃべり、歓声。静かな教室とはとてもいえない。

「教科書、ノート何見てもいいで、友達同士で教えあつてもいいでえ。友達のを写す以外やつたら何やつてもええからなあ。できた者から前にプリント持つてきいやあ」

と生徒たちに声をかけるのは、土肥（とひ）つき先生（43歳）。この学校で20年以上



現在担任は持っていないが、放課後の補習授業は続いている。「全員卒業」を目指しての心のこもった指導は人気がある



数学を教えている現役の高校教員である。さらさらでストレートのロングヘア。淡いクリーム色のフリースに細身のグレイのジーンズとラフな服装で、化粧はしていないが、やはりどうみても女の先生。声を聞いても……？

実は、この先生、7年前までは「男」の先生だった。黒々としたヒゲをたくわえ、短くパーマをかけた土肥謙一郎という名前の「男」の先生だった。ときにはやんちゃをする生徒に声を荒らげ、威圧的な態度で叱りとばすこともあった。

### 「女装好きの間違った存在」

話は、8年前にさかのぼる。土肥先生は悩んでいた、自分のセクシユアリティについて。昼間は男性教員として仕事をこなしながら、夜、1人になると女性ものの服を身につけたり、テレビに映るニューハーフを見て「自分もあんなふうに生きてみたい」とあこがれを募らせていたりしていた。

女性の服への憧れや、女性であるほうがフィットするという感覚は、子どもの頃からあった。しかし、それが何なのか、自分は一体何者なのかつかめない……。そんな自分を好きになれず、「自分は変態や」と自分自身を否定し続けていた。それは結婚し、子どもが生まれても変わることはなく、男性として生活する昼間の自分と、女性の服を身につけて安らぎを覚える自分との間で苦しんでいた。

土肥先生が自分のセクシユアリティに気づいたのは、ある同僚教員からの「自分

分はゲイである」というカムアウトがきっかけだった。

それまでまったく同性愛やセクシユアリティに無知だった土肥先生は、これをきっかけに勉強を始めた。そして本の中で、「トランスジェンダー」という言葉に出会った。「自分の性自認が肉体の性と食い違っている人々がいる」。この記述を読み、「これは自分のことや、紛れもなく自分はそうや」と気づいたのである。自分自身のセクシユアリティを獲得した瞬間だった。長年、「女装好きの間違った存在」と自らを否定してきたが、そうではないと初めて自分の存在そのものを肯定できた瞬間だった。

近頃話題になっている「性同一性障害」は医学用語である。「反対の性に対する強く持続的な同一感」があり、具体的にホルモン療法や手術（性別適合手術）を受けて反対の性の体になりたい、反対の性で社会的に暮らしたい、などの気持ちを持つたりする。また「自分の性に対する持続的な不快感」があり、たとえばMTF (Male to Female) 男性から女性に) ならベニスや睾丸、ヒゲ、スーツ・ネクタイ姿に対して強い嫌悪感を持つたりする状態を指す。

### 女性の服への憧れや、女性であるほうがフィットする

という感覚は、子どもの頃からあった

つたりする状態を指す。それに対し、「トランスジェンダー」という言葉は、性別違和感の有無にかかわらず、「性別を超越して生きる人」を総称する。

土肥先生は現在、性同一性障害の診断書を持ち、専門医によるホルモン療法も受けてはいるが、自らを表現するときには「トランスジェンダー」を使う。トランスジェンダーには、肉体の性は変えるつもりはないが、社会的に反対の性で生きる人々なども含まれていたり、多様な生き方を表現する言葉として用いられている。

「多様な性のありようを認めるべきだ」という主張もこめて、土肥先生はこの言葉を好んで使っている。

### パートナーへのカムアウト

トランスジェンダーであると自覚した土肥先生ではあったが、だからといってすぐに「今日から女性です」と、生きていけるわけではない。妻（パートナー）になんと言おうか、学校には、子どもたちには……。クリアしなければならぬ課題は山ほどあった。

この気づきによって、「女装」への罪悪感は減り、夜「女装」することは前よりも増えたが、それはあくまでも1人きりのときのことだった。妻にカムアウトする勇氣は、なかなか出なかった。しかし、24時間「女性」として生きたいという思いは募るばかり。1年以上経ったある晩、意を決した先生は、ついにパート

ナーに告げた。

「子ども頃から違和感を持っていたこと」「トランスジェンダーと知ったこと」

「夜、一人で女性用の服を着ていたこと」。

何も知らなかった彼女は、それこそ

「天地がひっくり返る」ほど驚いた。そ

れでも彼女は「驚いてはいけない」「拒

否してはいけない」と必死に冷静さを保

ちながら、このカムアウトを聞き、「も

っと早く告げてくれていたら、私の服を

貸してあげたのに」とまで言ってくれた。

ただ、事実を知ったからといって、す

ぐに受け入れられるものではない。ある

ときなど「私の好きだった謙一郎君はど

こにいったの？ 謙一郎君を返してよ」

と泣かれた。身の裂けるほど辛かったが、

自分以上に彼女のほうが辛いのだと思っ

た。

パートナーにカムアウトしたことで、

土肥先生はついにフルタイム（昼も夜も

24時間）で、トランス（性別を移行するこ

と）を実行することにした。彼女の同意

を得つつ、半ば強引に。

トランスを開始するにあたって、いち

ばん嫌悪感を感じていたのは、ヒゲがあ

ることだった。そこでまず、ヒゲを剃り

始めた。毎日毎日剃った。肌が荒れても

やめられない。そのうち一本一本抜くよ

うになる。毛穴からは血がにじむ。でも

やめられなかった。次にパーマをやめ、

髪の毛を伸ばしはじめた。学校にもレデ

イスのパンツ姿で通い始めた。

「トランスを」始めた当初、学校の中で

困ったのはやはり、生徒の視線でした。

というのも、今はかなりトランスが進ん

できているのでそれなりの外見にはなっ

てきていますが、当時はかなり厳しかっ

たと思います。服装なんかをガラッと変

えてしまったので、おそらく何も知らな

い生徒たちは『どないしたんや？』みた

いな感じだったと思います」

と、土肥先生は話す。今まで男性だっ

た人が、ヒゲを剃り髪の毛を伸ばしたと

しても「女性」には見えにくい。このこ

とは性別を移行するトランスジェンダー

にとって、共通の悩みでもある。

それでも、トランスすることに必死だ

った土肥先生は、その視線に耐えた。

「ひるみなくなかった」という。

そんな先生と生徒の緩衝材の役目を果

たしたのは、放送部の生徒たちだった。

「ビックリせえへんかった」

土肥先生は、20年以上放送部の顧問を

務めている。

「先生を初めて見たとき、美人やなあ

思った」と言うのは、今年放送部に入部

した新入生のめぐみさん（仮名）。傍ら

で聞いていた土肥先生、小さくガツッポ

ーズ。

「うちが入学した頃、ブラジャーつけて

る男の先生がいんねんかあと、学校中で

評判やった。それがどの先生か知らんか

ったけど、放送部に入って目の前にいる

のがその先生やと知ったときは、ビック

リしたわ」という。それを聞いて今度は

土肥先生、がっかり。「ブラジャーをつけ

てる男の先生」なんかじゃない、と内心



土肥 謙一郎・数学

上 男性教師として教えていた頃。1962年大阪府に生まれ、同志社大学を卒業後、現高校に勤務。99年からフルタイムでトランスを開始。2001年に岡山県立岡山病院に、04年に、関西医科大学附属病院に通い始める。同年、名前を「いつき」に改名、治療は第2段階のホルモン療法に進む

左 取材のために集まってくれた放送部の卒業生に囲まれて。（左から4人目が先生）

右 20年以上顧問を務める放送部の放送室で。部の生徒の親の一部には、先生のセクシュアリティについて否定的な見方もあるが、それに対して「親は親、自分は自分」と生徒は考えている（左端が先生）



男性時代を知る卒業生も、今は自然に受け容れ、先生の心強い味方だ。生徒たちの人生に与えた影響は少ない(左から4人目が先生)



答えた

同期卒業のモッさん(20歳)が、さすが言う。

「うちは、合宿(2002年8月)で聞いたで。『うちなあ、あれやねん』って『そっなんや』って答えた」

「別に、ビックリせえへんかった」と2人とも口を揃える。外見が、「そこそこ男で、女にも見えるな、いう感じやった」(モッさん)かららしい。生徒の言葉は辛らつた。

「あの合宿のときはまだ、悩みがあったころや」と、土肥先生。

「うちの頃は、ほほ女やった」と語るのは、今年の春卒業したアベコとユンチャン、コンチャンだ。

「ドッヒーからホルモン治療を始めたって聞いたで。うちが『先生、胸、大きくなったか?』って聞いたら、『大きいなつたで』って嬉しそうに答えてた」(アベコ)

一同爆笑。

先生からカムアウトされたときの生徒の反応は、意外にあっさりしたもの。カムアウトの前に先輩や友人から聞いていたという人も多いからだけでなく、い

クラスメートから

「あの先生、

ブラジャーしてんの?」

と言われたときは、

すごく腹が立った

つも親しくつきあっている土肥先生は土肥先生で、「男」でも「女」でもない、という意識が強いからだ。そして、このカムアウト以降、生徒たちもそれぞれが性同一性障害に関心を持ち、ニュースや雑誌を読むようになった者もいる。

土肥先生をよく知らない生徒のなかには「あの先生は、男? 女? どっち?」と、たずねる子もいる。

「クラスメートから『あの先生、ブラジャーしてんの?』と言われたときは、すごく腹が立った。土肥先生という存在を何も知らずに、興味本位でそういうところだけ見て、あの人はどうやっていうのは腹が立つな。そのときは『そうやあ、それがどないした?』って答えたけどな」と、ヤッさん。

一同「わかる、わかる」。

先生のカムアウトを受けて、生徒たちの中に偏見から先生を守りたいという気持ちが生まれたのではないだろうか。

ただ、よく知らない生徒たちが混乱するのも仕方がない面はある。改めてカムアウトしない理由について先生は、「1000人の生徒に毎年言いつづけるのは面倒くさいし、言わなくても見ればわかるでしょう」と言う。「男? 女? どっち?」と聞かれるようなときは、「男とか女とか(他人が)勝手に決めないことが大事だよ」と、答える。

学校には正式に伝えてある。裁判所の審判を経て、「いつき」という名前に改名したことも伝えた。校長先生も理解して、いろいろとバックアップしてくれて

いる。また、同僚の先生たちも、おおむね「そうなんや」と受け止めている。なかには、「以前いた学校にもそういう生徒はおったで」と、好意的に接してくれる先生もいる。

## しんどさを打ち明ける仲間

土肥先生は長年、人権教育、同和教育にも力を入れてきた。7、8年ほど前、担任していたクラスの生徒の中に同和地区出身の子がいた。彼女はそのことをなかなかクラスメートに言えずにいた。そんな彼女を土肥先生は、ときに励まし寄り添いながら、クラスの中で語れる雰囲気をつくるか試行錯誤していた。そこで、クラス通信を出すことにした。毎週欠かさず発行し、その中で、同和地区のことや差別について書いた。クラスの中のことを、どんな小さなことでもみんなでき共有できるようにしたかった。

そうした取り組みの成果もあり、担任して2年目の2学期、同和学习の時間に、彼女はクラスメートの前で同和地区出身であることを告げた。彼女に対して、みんなも自分のしんどかったことを話す、という形で返した。「自分は中学の頃、いじめにおうてたんや」とか「実は私の父は本当の父じゃない」など……。うわべだけのつきあいだったクラスが、しんどさを打ち明けあえる仲間へと変わっていった。これ以降、クラス全体の雰囲気もがらっと変わった。そのことは、勉強の面でも良い影響を与えた。1年、2年、3年と学年を経る

## 父ちゃんは、 父ちゃんや。 男でも女でもない

たびに生徒の数が減っていく現実、先生は頭を痛めていた。授業についていけずに退学していくのである。それを食い止めるために、数学の補習授業を始めた。彼女が同和地区出身であることを語って以降、このクラスは「全員の進級・進路実現」を合言葉にして支えあった。わからない生徒には、わかる生徒が教えた。嫌がる子がいたら、「全員で進級するんや。やれ！」と、首根っこをつかむようにして教えた。その年のクラスは、全員進級した。

現在は担任を持っていないが、数学の補習授業は続いている。

この経験は、土肥先生自身のその後の人生にも少なからず影響を与えることになった。

## イメージチェンジ!?

卒業生の真下敦史さん(29歳)は、土肥先生のトランスを受け入れた理由をこう語る。

「土肥先生は、生徒の立場に立って考えしてくれる先生だったんです。なにがなんでも校則を優先するという先生ではなく、生徒の言い分にも耳を傾けるような先生です。だから、生徒にも好かれていました。もしそういう先生じゃなければ、(トランスを知ったことで)関係も切れた

かもしれないし、別の見方をしたかもしれないですね」

真下さんと高尾寛さん(30歳)が在学中は、土肥先生は普通の男の先生だった。卒業してしばらくして、先生がヒゲを剃り髪を伸ばした。少し驚いたが、イメージチェンジだらうくらいに思っていた。

数年後の合宿のとき、先生の薄着の服の下からブラジャーのラインが見えたとき、仲間と「いったいあれはなんだ?」と言っていた。同期卒業のOGには悩みを打ち明けていたらしく、その彼女から、先生が性同一性障害であることを聞いた。しかし、「そんなわけあるか!」と、一笑に付した。それから1年半後の合宿で、先生自身から聞き、数々のなぞが解けた。そして、その事実を受け入れることができた。話をしたり、接していると、在学

時代の土肥先生のままだった。話し方も、生徒と一緒に「無茶をする」その行動力も、何も変わっていなかったから。

## 支えてくれるもう一つの存在

男だったときの先生を知っている生徒にとつて、「女性」となった先生を受け入れるのに時間がかかった。しかし、家族にとつてはさらに長い葛藤が必要だった。

カムアウトしてから、肉体を変えるホルモン治療をパートナーが認めるまで、実に6年という月日を要した。彼女は「服装や社会的に女性になるのはいいが、体を変えるのはいや」と、拒否してきた。それでも、体を変えることに同意したのは、トランスしても以前と変わらぬいつきさんに、信頼を取り戻したからだろう。

まだ幼かった子どもたち(13歳と7歳)も、6年かけて「父親」のトランスを見守ってきた。そして、「父ちゃんや、父ちゃんや。男でも女でもない」と、理解している。

「男か女かなんて、考えたことはない。ドッヒーはドッヒーや」と、生徒たちも言う。部室でみんなで集まって、たわいのないおしゃべりをして、そこにはいつもドッヒーがいて……。

「こんど、一緒にユニクロ行こう。レディースのジーパンを一緒に買おうな」。そこには、ありふれた生徒と先生の会話があるだけだ。

